

# 千利狸の呟き

土佐日記をはじめとする紀行は日本文学の主要なジャンルのひとつである。しかし、長い歴史の中で、旅ができたのはほんの一部の人々に限られていた。太平の世となった江戸時代には、社会が豊かになり、旅は庶民にも開かれたものとなった。しかし、幕藩体制の下で、人々の移動は厳しく制約され、特に農民は大富農であっても特別な許しがなければ、土地を離れることは不可能であった。庶民にとって可能であったのが、御伊勢参りのような社寺への参詣、あるいは富士山、御嶽山などへの信仰登山を目的とする旅であった。旅は人生における一大事件であり、健康な体と体力、そして多額の費用が必要であった。

費用の工面では、講の存在が大きかった。今で言うトラベルローンにあたるであろうか。講を落札し旅に出られた人には、きっと宿題が課せられたことだろう。ひとつは講の仲間の代参であり、もうひとつは土産話である。道中では物見遊山よろしく見聞を広め、土産話のネタを集めるのに忙しく、ワクワクする毎日であったに違いない。日本狸は斯(かく)も旅好きが多く、旅を夢見る。

吾狸もまた旅好きである。目的地での観光はもちろん、そこに至る道中も大きな楽しみである。移動手段は、鉄道、飛行機、船、バス、車、何でもよし。窓があり、景色が見えればそれでよし。飛行機の経験があまりなかった頃、福岡から千歳までDC-8に乗ったことがあった。搭乗中、首が痛くなる程窓の外ばかり見ていた。結局見えたのは雲だけであったが、それでも大満足だった。

鉄道の旅では今はない夜行も嫌いではなかったが、やはり景色のみえる日中が良い。新幹線はトンネルが多く、速すぎて景色が楽しめず、あまり乗りたくない。吾狸が一番好きだったのは特急「白鳥」であった。廃止を知った時は、涙が出そうになったが、出なかった。まだまだ乗ってみたい列車があるからだった。時間ができたら速くない列車に乗って、のんびりと旅をしたいものであ

## ～旅と狸とCOVID-19～

### 旅に行きたい狸

る。それにしても次々と消えて行く地方路線に、吾狸に残された時間が心配である。そして今はコロナ禍である。コロナ禍以前の大型連休では、航空、新幹線、そして高速道での大混雑をメディア各社が競って取材クルーを繰り出し、報道合戦をしたものであった。今では閑散とした情景を写し出しているばかりである。数年前、吾狸の娘に1日遅れで秋田駅に到着する夫を迎えに行った時、2才だった孫が父親を見つけ走り寄ったところから取材カメラが回り始めた。娘を抱き抱えた婿殿のインタビューとなり、その日のニュースに流れたこともあった。この2年近く会っていない。ずいぶん大きくなっていることだろう。

旅にいづることにより  
ひとみあかるくひらかれ  
手に書き洋紙は提げられたり  
・・・・・・・・・・・・・・・・

多くの詩人、作家が旅についての作品を残している。旅情と言う言葉がある。中学の音楽で「旅愁」を歌い、高校の頃に「旅人よ」が大ヒットした。旅を題材とした歌はジャンルを問わず相当な数となる。共感する人が多いことの証だろう。日常生活を離れる旅には、心の中を断捨離し、エトランゼとして自分を見ることで発見するものがあり、人生の途上で綾となり、節となるのではないだろうか。

待て、しばし、そしてCOVID-19よ早く終息せよ。されば、老狸は「われもまたアルカディアへ」と心に刻み、旅に出づるものを。

